

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Metalingual expressions referring to types of linguistic behaviour 2 : Formal compliments

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉戸, 清樹, 塚田, 実知代, SUGITO, Seiju, TSUKADA, Michiyo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001133

言語行動を説明する言語表現

— 公的なあいさつの場合 —

杉 戸 清 樹

塚 田 実知代

SUGITO Seiju, TSUKADA Michiyo: Metalingual Expressions Referring to
Types of Linguistic Behaviour II
— Formal compliments

要旨：そのつどの言語行動の種類について明示的に言及するメタ言語的な言語表現類型について、杉戸・塚田1991で書きことばの専門的文章を検討したのに引き続き、話しことば、とくに公的なあいさつを対象とした記述分析を行なった。

公的あいさつには、表現のあらたまりを目指したと解釈されるレトリカルな言い回し（動詞そのものも文末形式も）によって、くりかえされる場合も含めて一つのあいさつに平均して3~4回、相当のバラエティの言語行動を説明するメタ言語表現が現れる。書きことば資料で優勢であった意志や希望を明示する文末形式は公的あいさつでは少数である一方、文末の敬語要素はあいさつのメタ言語表現には相当豊富である。また、当該の言語行動を直接的に表現する直接表現は、メタ言語表現に比べて少ない。これらの事実、あいさつのあらたまり性を目指して表現の直接性を避けた結果と解釈される。

発話行為論で言う発話内行為が明示的に言語化される実態を記述し、それが語用論で言う言語表現における対人的なあらたまり（丁寧さの一種）と深く関連しているという解釈を、本稿では言語行動研究の観点から指摘した。

キーワード：言語行動 メタ言語表現 言語行動の種類 あいさつ あらたまり

Abstract: In everyday Japanese, a great many types of metalingual expressions which refer to the types or functions of linguistic behaviour can be observed. Following the authors' recent article (Sugito・Tsukada 1991), this article pursues a descriptive survey of these types of metalingual expressions by collecting examples from the corpus of compliments and speech made on official occasions.

Some characteristics of the expressions are as follows;

- 1) Figurative and rhetorical expressions are often observed, which seem to make compliments more formal.
- 2) Voluntary or optative expressions are rarely observed when compared with the case in professional articles (Sugito・Tsukada 1991).
- 3) Honorific elements are essential to these metalingual expressions.
- 4) Direct expressions using objective (non-metalingual) forms are less suitable for formal compliments.
- 5) These types of metalingual expressions are related to the formality of compliments and speech.

Key Words: linguistic behaviour, metalingual expression, types of behaviour, compliment, politeness

目 次

1. はじめに
 - 1.1. 本稿の位置
 - 1.2. 記述の観点

2. 記述の対象
 - 2.1. 話しことばとしての公的あいさつ
 - 2.2. あいさつのあらたまり性
 - 2.3. 資料と用例採集の手順

3. 記述の結果
 - 3.1. メタ言語表現の中心的な動詞（句）
 - 3.2. 動詞（句）の修飾要素と目的要素
 - 3.3. メタ言語表現の現れる頻度
 - 3.4. メタ言語表現の文末
 - 3.5. メタ言語表現の出現位置
 - 3.6. 1文中に複合的に出現するメタ言語表現
 - 3.7. 「直接表現」との関係

4. まとめ

1. はじめに

1.1. 本稿の位置

本稿は杉戸・塚田 1991（以下、「前稿」と略称する）に続くものである。

前稿では、いわゆるメタ言語的（metalingual）な機能をもつ言語表現の広がりの中から、言語行動の主体（話し手・書き手）が、いまから行おうとする（ないしいま行ったばかりの）言語行動について、その言語行動としての種類や機能を明示的に言及・説明する表現類型に注目し、とくに書きことば、それも言語研究の分野での専門的な文章を対象として、この種のメタ言語表現の具体的な現れ方を記述・検討した。

本稿では、同じ言語表現類型が話しことばではどのような現れ方をするものであるかを検討する。

【注】本論をまとめるに至る経過および二人の筆者の分担は、前稿と同じである。

すなわち、基本的な枠組みと観点を杉戸が提示し、これに基づく事例の収集と整理を塚田が担当した。この分担に応じて素稿を執筆し、両者の協議を経て成稿を得た。研究課題その他の詳細は前稿 pp.133～134 の【注】を参照されたい。

1.2. 記述の観点

前稿が指摘した主なことがらは以下の通りであった。

- (1) 当該の表現の中心をなす動詞は、「言及する／検討する／例を挙げる／示す／付記する」などいわゆる遂行動詞としての意味を備えたものから、本来はそうでないけれどもその文脈において副詞的成分や対象格成分の助けを得てその意味を発揮していると解釈される「～という点から出発する／～の点に立ち返る／本題に進む／～に目を移す」などまで、バラエティの広がりが認められる。
- (2) 文末表現形式としては「～してみよう／～してみたい／～しよう／～したい」に代表されるような、表現主体の能動的な意志を明示するものが多い。
- (3) 消極的・否定的な言語行動を言及する例も、次の3種類など少なからず観察される。

- ① 肯定的な意味をもつ動詞に否定要素を付けるタイプ（「～の紹介はここでは行わない／～は深くは触れないで置く」など）
 - ② 動詞自体が消極的な行動を意味するタイプ（「割愛する／省略する／避ける／やめて置く」など）
 - ③ 動詞自体が行動終結を意味するタイプ（「終える／閉じる／筆をおく／しめくりとする」など）
- (4) 言及されるものごとに関して、その力点の置かれ方に少なくとも4種類が観察できる。具体的にはこれらの複合した例も現れる。
- ① 話題内容そのもの（「本論では～について述べる／～を指摘する」など）
 - ② 文章の流れや構成（「～から始める／次に～に移る／稿を閉じる」など）
 - ③ 文章構成の単位としての言語行動（「例を挙げる／～から引用する／～を補う」）
 - ④ 読者や関係者へのあいさつ行動（「～をお詫びする／～に謝辞を捧げる」など）
- (5) 出現する文章中での位置には、「最初に／最後に」などの副詞的成分による制約を一方では受けながらも、たとえば「断る／始める／概観する」など文章の始まり近くに多く現れるものと、「付言する／お詫びする」など末尾近くに多いものというような片寄りも観察される。

本稿では次節に述べるような話しことば資料を対象に検討するのであるが、基本的には、以上のような前稿での観点に立った検討から着手する。言うまでもなく、前稿は書きことば、それも学術分野における専門的文章を扱った限りのものであるから、そこでの観定の範囲も限定されたものであるおそれは免れない。そこで本稿では、今回の具体的な資料を前にして適当だと思われた限りは、集計の手順を変更し、観点も増やし、結果的に第3章に述べる7種の観点からの整理分析を試みた。次のようである。

- ① メタ言語表現の中心的な動詞（句）

- ② 動詞の修飾要素と目的要素
- ③ メタ言語表現の現れる頻度
- ④ メタ言語表現の文末形式
- ⑤ メタ言語表現の出現位置
- ⑥ 1文中に複合的に出現するメタ言語表現
- ⑦ 「直接表現」との関係

あらかじめ付記すれば、ここで採用した観点や集計手順が、問題の表現類型を話しことば・書きことばを通じたさまざまなジャンルの言語行動や言語作品について記述・分析する際に広く適用できるような、汎用的な観点や手順であるかどうかは今後の問題である。これらが、前回と今回、わずか二つのジャンルをいわば事例的に検討した際に採用したにすぎないものであって、今後、対象を広げていく場合にはもちろん、同じジャンルを再度対象としようとする場合にも、拡張したり再検討する必要があることは言うまでもない。

2. 記述の対象

2.1. 話しことばとしての公的あいさつ

前稿の専門的文章という書きことば資料とは対比的な検討を目指して、ここでは話しことば資料を対象とする。そして、話しことばのうちでも範囲を細かくしぼりこんで、地方自治体（一部、国の機関も含む）の関与するいろいろな儀式・会合・会議の場で首長をはじめとする主な参加者の行った公的なあいさつを記述対象とする。具体的には、『公用あいさつ辞典』（飯山章夫編著 1971, 帝国地方行政学会刊）に集録されたあいさつ・式辞・祝辞・甲辞などである。この資料を選ぶについては、話しことばといっても、それらが次のような点でやや特殊な性格を持つことに留意しておく必要がある。

第1は、日常生活のふだんの会話のように、複数の人間が短いことばをやりとりして進める対話でなく、一人が多くの聞き手に向かって、ある程度の時間、一方的に語りかける姿をした言語行動であるという点である。あいさつと言っても日常の定型的なあいさつ場面では、短いあいさつことばが複数の

主体から交互に発せられる。これに対してここで扱うあいさつは、ある程度の（たとえば1分以下の時間ですむ事例は今回の例にはごく少ないだろう）時間をかけて行う、まとまった内容を備えたあいさつである。

第2は、必ずしも文字や書きことばからすっかり独立した場合は多くない（その可能性が高い）という点である。それぞれのあいさつは、巻紙などのしかるべき用紙にきちんと書かれた文面が読み上げられた場合から簡単なメモだけによった場合まで、程度や形式の差はあっても、「読む」という行動に支えられた姿で実現したのが多いと推測される。自治体の首長が行うあいさつなどではとくに、当人以外の事務局が準備した文面を読み上げるケースも含まれているだろう。もちろん、中には、現場では文字に頼らず直接的に話しかける形で行われた場合などを含んでいる可能性は否定できないが（資料とした書には明示的な説明がない）、純粋な話しことばとは言えない「読みことば」というべき種類のものが多いことは留意すべきである。もちろん、そのいずれにせよ、会合などの席上、参加者を前にして、音声の形で実現された言語行動の結果としての言語作品であることは共通している。この共通性を重視して、今回はこの資料を選んだのである。

2.2. あいさつのあらたまり性

第3の留意事項は、言語行動としてのあらたまりの程度についてである。一般に言語行動全体の中でもあいさつは、儀式性・形式性、あるいはあらたまりの程度の強い行動であると言ってよいだろう。ことばを交わすこと自体に対人関係を形成したり調整したりする機能の認められるあいさつ行動であってみれば、言語・非言語にわたってその形をあらため、一定の形式に整えることが求められるのはうなずけよう。今回扱う資料の場面は、自治体の関与する儀式や会合であるから、その場は相当程度あらたまった儀式性の強い場面であることが多いと推測される。議会、行政一般、商工、農林、学校教育、社会文化など多岐にわたる公式の行事の場面が多く集録されており、中には「ソフトボール大会激励のことば」とか「ひなまつりお祝いのことば」など比較的気楽な場面（それとて、その中でのあいさつ場面はそれなりにあら

たまった小場面であろう)も含まれるが少数である。つまり、もともと形式性やあらたまりがつきまとうあいさつの中でも、場面の制約から言って、とくにあらたまりや儀式性・形式性の強いあいさつが多く含まれている可能性が高いということになる。

このあらたまり性ということについて、筆者らは一つの仮説的な前提を考えている。すなわち、あらたまりの性格を強く持つ公的あいさつには、問題のメタ言語表現が現れやすいだろう、と考えるのである。この前提として、問題のメタ言語表現はあらたまり性・形式性の強い言語行動ほどよく現れるという、これも一つの仮説を考えている。これまでに筆者らが検討したところによれば、たとえば、書きことばのうち、公的文書の書式をはじめとする公用文(杉戸1985)や学術的専門文章(前稿)にはこの種のメタ言語表現は高頻度に、かつ定型性も記述できるような姿で現れる。これに対して、私的な書簡文やエッセイなどにはきわめてまれである(未発表資料)。「現れやすい」という事実を示すためには、他のジャンルや種類の言語行動での現れと比較することが前提となるが、現段階ではそうした比較対象がほとんどない。今後の課題に結びつく仮説である。

本稿では、この仮説に立ってあいさつのあらたまり性という一つの基準を軸にしながら、問題のメタ言語表現を検討していきたいと考える。あらたまり性という基準を鍵にあいさつ資料を検討する点については、前稿との対比を注意しておきたい。前稿で専門的文章を対象にした際に筆者らは、仮説的前提として次のようなことを考えた(前稿 P.143. 要旨)。

専門的文章では、論的内容的な素材である事実や考えが、表現伝達の中の中心的な関心事である。したがって、その関心事である素材を十分にわかりやすく表現し伝えることが書き手の言語行動の規範原則となる。文章中にメタ表現が現れるとするなら、この原則を実現するための、内容そのものや論述の過程のわかりやすさを支えるような、具体的には文章的内容的な構成、流れ、展開という側面に言及するメタ言語表現が多いであろう。これに対して、あらたまり性は、素材となる内容より話し手と聞き手の対人

的な関係にかかわる基準である。そうした基準をそれぞれのあいさつ行動が満たす上で、メタ言語表現の分野ではどのような工夫が見られるのかを検討していこうとするのである。

2.3. 資料と用例採集の手順

(1) 資料について

『公用あいさつ辞典』には、1,196のあいさつの実例が集録されている。「まえがき」などに記されたように、公的な場面でのあいさつ文を考える手がかりとして参考となるような「先例」を全国の地方自治体の関係者の協力によって集め、目次によれば、政治／議会／行政一般／警察・消防／民生・福祉／保健衛生／商工／農林水産／労働／建設・運輸／学校教育／社会文化／体育・スポーツ／結婚式・弔祭という広範な分野にわたっている。そうした分野の公的な行事の場面で、あいさつ（式辞・祝辞・謝辞・訓辞・弔辞などを含めてこの用語を用いる）として現場で実際に行われたであろう姿の、冒頭から締めくくりまで全体が文字の形になって示されている。語られたそのままを録音にもとづいて文字化したものか、あらかじめ準備された文字原稿によって復元したものかなどはその解説からは不明であるが、収録された文言からは、おそらくほぼこのままのことばでのあいさつが実際になされたと考えてよいと判断した。

類書の多い中から当該の書を選んだことに特別の理由はない。目的とする範囲の実例を比較的豊富に集録していて、手近に利用できたので選んだのである。すでに20年も前の編集であるから、最近の実態といくらか異なる面が含まれているのかもしれないが、そうした時代性は本稿の目的にとっては当面考慮の外においてよいことであろう。筆者らは、ほかに『歴代総理大臣演説集』といった類似の資料も対象にしているが、時代性ということが問題となるとすれば、そうしたものととも将来の課題とすべきだろう。

今回考察の中心的な対象としたのは、集録された実例のうち、具体的

な会合や儀式の場で聴衆を直接の聞き手として行われたあいさつと見なしうるもの763例である。また、この他に、聴衆や参加者を直接の相手とはせず、世の中一般の人々やある特定の範囲の相手を目指して行なわれた「宣言・決議・要望」という種類の実例が59例収められていたのも、763のあいさつとは区別しながら対象とした。合計822例となる。

これらのほかに「請願書・表彰状・意見書・市民憲章・書簡文例」など性格の異なる実例も含まれていた。その言語行動が話しことばの形で実現される具体的な場が特定しにくい種類である。また、関連の法令や関係文書の書きことばを参考のために掲げたり、あいさつの一部分だけを「参考文例」として掲げた例もあった。これらはいずれも今回の考察対象から除外した。

(2) 用例採集の手順

問題のメタ言語表現を採集する際の手がかりとして次の3点に留意した。

- ① あいさつの中で行っている言語行動を意味する動詞や動詞句に注目する。

「ごあいさつ申し上げます／ご祝辞を申し述べます／お願いいたします／厚く御礼申上げる次第でございます」など

- ② 文末表現として、話し手の意志的な言語行動であることを表現するものに注目する。

「～したいと存じます／～させていただきます／～いたそうと存ずる次第でございます」など

- ③ その言語行動の主体は、あいさつの話し手自身であること。

いうまでもなくこれらは手がかりであって、これだけを排他的に適用するという意味の選定基準ではない。とくに②が「～します／～を申し上げます」など意志や希望が明示的でない文末表現を排除するものでないことは注意しておく。

逆に、次のようなものは対象から除外した。

① 思考そのものや将来の展望を述べる表現

「～に違いないと考える次第です／大きな役割をはたすものと信ずるものであります」など

② 聞き手への直接的な依頼・希望の表現

「積極的にご参加ください／～してほしいと思います」など

③ 言語行動を含む行動ではあるが、それ自体としては言語行動とは言えない行動を表す表現

「ここに～会を開催いたします」「以上で～を閉会します」など。ただし「ここに～会の開会を宣言します」「閉会の辞といたします」という表現があれば採取した。ある動詞句の表す行動が言語行動であるかどうかの判断で迷う場合がないわけではない。たとえば「歓迎する／感謝する／悼む／ぬかづく」などがそうであるが、ここでは副詞的な修飾要素や文脈も考慮して、その場での具体的な言語行動が含意されていると判断した例は積極的に採取する方向を選んだ。

用例採集には図書カードを利用し、1枚のカードには原則として1用例（およびその出典情報）を記載した。1文のなかに複数のメタ言語表現動詞が含まれるもの、一つの動詞が二つの言語行動を示す名詞を受けるもの（「お礼とお祝いを申し上げます」など）は、それぞれ別々の用例として扱った。また「～する次第でございます」「～する機会を得たことは～」「～することといたします」など連体句にメタ言語表現動詞を含むものも、その全体を例として採用した。

結果的に、763のあいさつ例（やや熟さないが、用例とか実例という用語はあいまいなので、以下では集録されたあいさつの一つ一つを「あいさつ例」と呼ぶ）から採集できたメタ言語表現（動詞句）の総数は2,801例となった。

また、59例の「宣言・決議・要望」類からも同種のメタ言語表現が81例採取された。ただ、これらは言語行動として見た場合、その会合で読み上げられたとしても、実質的にはその現場に参加する人たちを直接の相手とせず、たとえば世の中一般の人や目指す特定の相手に向けて行われた「宣言・決議・

要望」であるという点で、ほかのあいさつ例とは異質である。以下の検討では別扱いとした。

3. 記述の結果

3.1. メタ言語表現の中心的な動詞（句）

問題の表現の中心をなす動詞（ないし動詞句）の姿はまことにバラエティに富む。これらを表1～表3に一覧表の形で示す。

表1：今回の資料の中心をなす群の例であって、「宣言・決議・要望」類を除くふつうのあいさつにおいて、通常の文（並列文も含む）の文末に現れた動詞（句）の一覧。

表2：同様に「宣言」類以外のあいさつにおいて、文の主節や目的節を構成する「こと」にかかる連体修飾句に現れた動詞（句）の一覧。

表3：「宣言・決議・要望」と分類された文章例に現れた動詞（句）の一覧。

表1 メタ言語表現に現れた動詞(句)とその修飾要素

○は副詞的要素, △は目的要素及び内容

() の数字は, 出現位置を示す。(3.5.を参照)

あいさつする

あいさつする(頭 32, 中 一, 尾 1)

○開会にあたり, 開始にあたり, 出発に際し, 一言, 閉会にあたり, 礼をかねて, ~にあたり, ~に際し △~に対して

あいさつとする(一, 1, 230)

○以上, 終わりに, (たいへん, はなはだ, まことに) 簡単ながら(ではあるが, だが), ころより, 最後に, 尽きぬなごりを込めて, まことに粗辞だが △祝いの, 開会の, これをもって, 辞任の, 就任の, 新年の, 壮行の, 退職の, 着任の, 年頭の, 閉会の, 喜びの, 礼の, 礼をかねて, 礼をもって, 別れの, 私の, ~の

あいさつにかえる(一, 一, 25)

○一言, 以上(はなはだ, φ) 簡単だが, はなはだ意を尽くせないが, はなはだ(まことに) 粗辞だが △就任の, 退任の, 礼の

あいさつを言う (130, 3, 一)

○改めて、案内に接し、開会にあたり、開催にあたり、恒例により、ここに、心より、この際、辞任にあたり、謹んで、はなはだ僭越だが、一言、閉会に当たり、皆様方に、～に先立って、～より、～を代表して △祝いの、慶祝の、新年の、立候補の、礼の、礼を兼ねて、～の

あいさつを終わる (一, 一, 1) ○これをもって △私の

言う

言い述べる (一, 4, 一) ○以下、次に △～について

言う (5, 7, 5)

○以下に、以上、開会に先立ち、ここに、最後に、次に、謹んで、特に、一言、はなはだ粗辞ではあるが、みたまに、靈に、靈前に △～について、～をことばを連ねる (一, 一, 1) ○いささか △追慕の

所感とする (一, 一, 1) △私の

所信 (所懐、所感) を言い述べる (8, 一, 5)

○以上、この機会に、一言 △一端を、～について

所信を言う (一, 一, 2) ○ここに △一端を

所信 (所懐、所感) を述べる (4, 一, 4)

○以下、いささか、以上、ここに、新年を迎え、次に、年頭に当たり、一言 △一端を、～について

断言する (一, 一, 1) △～と

述べる (一, 一, 3) ○ここに、一言 △経過を、蕪辞を

蕪辞を連ねる (一, 一, 2) ○いささか、一言

メッセージとする (一, 一, 1) △私の

悼む

哀詞を言い述べる (1, 一, 一) ○謹んで、～を代表して

哀悼 (追悼) の意を表する (4, 1, 一)

○心からの、深く、謹んで、許しを得たので

哀悼 (追悼) のことばとする (一, 一, 9) ○もって

哀悼の辞を言い述べる (1, 一, 一) ○謹んで

哀悼 (追悼、敬悼) の誠を捧げる (7, 一, 5)

○今ここに、恭しく、ここに、謹んで、みたまの前に、靈前に、靈に對し、～を代表して

悲しみのことばとする (一, 一, 1)

急逝 (逝去) を悼む (2, 一, 一) ○心から、許しを得たので

敬弔のまことを捧げる (一, 一, 1) ○ここに、謹んで、尊靈に對し

弔辞とする (一, 一, 6) ○もって

弔辞を捧げる (1, 一, 一) ○謹んで、霊前に
長逝を惜しむ (一, 一, 1)
追悼のことばを言う (1, 一, 一) ○謹んで
追悼のことばを捧げる (1, 一, 一) ○謹んで
追悼の辞とする (一, 一, 2) △私の
追悼の辞を言う (3, 一, 一) ○謹んで
追悼の辞を捧げる (1, 一, 一) ○謹んで、霊前に

祈る

祈りを捧げる (一, 一, 1) △安全が守られるよう
祈る (1, 17, 224)

○あわせて、終わりに、終わりに臨み、伸かけて、ここに、心から、最後に、静かに、切に、衷心より、謹んで、ひたすら、ひとえに、霊に対し、～に当たり
△安泰を、意義あるものとなるよう、いやさかを、いや栄えることを、栄冠を、栄光あらんことを、栄光を、永久の眠りを、活躍あらんことを、活躍することを、活躍してくれるよう、活躍を、完成を見るに至るよう、業績を挙げるよう、協力をしてくれるよう、健康に留意してくれるよう、健康を、健勝を、健闘あらんことを、健闘を、貢献することを、向上するよう、幸福を、幸い多からんことを、幸せであるように、幸せを、精進するよう、精進してくれることを、精進を、尽すいをしてくれるよう、尽力してくれるよう、成長するよう、清栄を、進捗を、盛會を、成果を挙げることを、成果を挙げるよう、成果を収めるよう、成功あらんことを、成功を、成長を、清福を、精励あらんことを、精励してくれるよう、多幸であるよう、多幸を、努力を、発展あらんことを、発展することを、発展するよう、発展を、発展を期するよう、発展を遂げるよう、繁栄あらんことを、繁栄するよう、繁栄を、飛躍を、奮闘を、(一路、永遠の、泉下の)平安を、みたまの菩提を、みたまの眠ることを、実を結ぶことを、(永久の、φ)冥福を、目的を達成するよう、隆昌を、隆盛あらんことを、隆盛を、～するよう

祈願する (一, 一, 2) △安全を守護するよう、～することを

祈念する (一, 3, 78)

○あわせて、終わりに、終わりにあたり、終わりに臨み、こころから、この意味において、最後に △活躍するよう、活躍を、取闘を、機能を発揮することを、寄与することを、健康を、健勝を、貢献するよう、貢献することを、栄えていくよう、幸多からんことを、尽力あらんことを、多幸を、伝統を築き上げるよう、発展するよう、発展することを、発展を、発展を遂げることを、繁栄あらんことを、繁栄するよう、繁栄を、人の和のくさびとなることを、仏の加護を、躍進するよう、安らかに眠るよう、有終の美を収めることを、夢と希望を与えるよう、喜びに相まみえんことを、隆盛あらんことを、隆盛を、～の中核となるよう、～

を

念じる (一, 2, 8)

△活躍を, 厚情に報いたいと, 発展することを, 繁栄を, 目的を達成するよう,
～と, ～を

黙祷を捧げる (一, 一, 1) ○謹んで

慰霊する

慰霊のことばとする (一, 一, 3) ○一言

慰霊のことばを言う (1, 一, 一) ○～にあたり

慰霊のことばを捧げる (1, 一, 一) ○謹んで

祝う

祝いのことばとする (一, 一, 225)

○以上, 終わりに, 心から, 心をこめての, これをもって, 謹んで, はなはだ意
を尽くさないが, はなはだ (まことに, φ) 簡単だが (ではあるが, ながら),
はなはだ (まことに) 粗辞だが (ながら), 礼をかね △私の

祝いのことばにかえる (一, 一, 8)

○はなはだ簡単であるが, はなはだ (まことに) 粗辞だが (であるが, ながら)

祝いのことばを言い述べる (2, 一, 一) ○一言

祝いのことばを言う (78, 1, 一)

○ここに, 心から, 一言, ～に, ～にあたり, ～を代表して

祝いのことばを捧げる (1, 一, 一) ○心から

祝いを言う (58, 19, 3)

○重ねて, ここに, 心から, 衷心から (より), 謹んで, 一言, 皆様に, ～にあ
たり, ～と共に, ～を代表して △榮譽に対し, ～に対し

祝う (24, 33, 10)

○終わりに臨み, 重ねて, ここに, この機会に, 心から, 衷心より, 謹んで, 一
言 △栄光を, 榮譽を, 開催したことを, 門出を, 慶典を, 健康を, 式典を, 修
了したことを, 祝賀式を, 盛會を, 卒業を, 誕生を, 表彰式が行われたことを,
メーデーを, 催されたことを, ～を

祝意を表する (1, 3, 2) ○ここに, 衷心より

祝辞とする (一, 一, 63)

○これをもって, はなはだ (まことに, φ) 簡単だが (ながら, ではあるが),
まことに (φ) 粗辞だが (であるが, ながら) △私の

祝辞にかえる (一, 一, 2) ○粗辞ながら △私の

祝辞 (祝詞) を言う (6, 1, 一) ○謹んで, 一言, ～を代表して

祝す (2, 1, 一) △盛會を, 壯途を

祝福する (3, 11, 19)

○終わりに、終わりに臨み、重ねて、ここに、心から、衷心より、ともに、～に
対し △荣誉を、門出を、健康を、将来を、成功を、前途を、長寿を、発展を、
名誉を、～を

祝福のことばとする（一、一、1）

訴える

訴える（一、一、2） ○強く △実現を、審判に

敬う

敬意のことばを言う（1、1、一） ○心から、～を代表して

敬意の念を捧げる（一、1、一） ○深い

敬意（敬老）の誠を捧げる（一、1、1） ○ここに、ころから

敬意を捧げる（一、4、一） ○心からの、心労に対して、深く

敬意を払う（一、1、一） ○深く △貢献に対し

敬意を表する（4、191、37）

○改めて、終わりに、終わりに臨んで、各位に対して、重ねて、ここに、この機
会に、心から、心からなる、深甚なる、衷心より、深く、平素から、まづもって、
皆さんに △意気に対し、英知に対し、活躍に対し、協力に対し、研さんに対し、
献身していることに、功績に対し、功労に対し、業績に対し、尽力に、心労に対
し、精励に対し、先見の明に対し、先達に、卓見に、（不断の、φ）努力に対し、
熱意に対し、配慮に対し、労苦に対し

敬服する（1、一、一） ○ただただ △配慮に

歓迎する

歓迎する（3、2、一） ○心から、～をあげて △皆様を

歓迎の意を言い述べる（一、一、1） ○心から

歓迎の意を表する（一、1、一）

○心から、はなはだまともりがなが △～に対して

歓迎のことばとする（一、一、4）

感謝する

感謝する（10、43、12）

○厚く、改めて、各位に対して、重ねて、ここに、この点についても、心より、
衷心より、深く、まず △恩恵に、機会を得たことを、協力に対し、苦労に、好
意に対し、厚情に対し、心づくしに対し、支援に、支持に、指導を、進展に寄与
していることについて、尽力に対し、心労に対し、声援に、努力に対し、果し得
たことを、骨折りに対して、～を

感謝の意を言い述べる（一、1、一） ○各位に対して、心から

感謝の意（謝意）を捧げる（一、1、1） ○心から △心労に対して

感謝の意（謝意）を表する（4、66、34）

○終わりに、厚く、終わりに、各位に対し、ここに、心から、この機会に、この機会を借りて、この席を借りて、重ねて、衷心より、当局に対し、深く、まずもって、皆様方に △協力に対し、功績に対し、功勞に対し、尽力に、支援に対し、心勞に対し、努力に対し、熱意に、勞苦に対し、～に対し
感謝のことばとする（一、一、1） ○粗辞ながら △私の
感謝のことばを言う（1、一、一） ○一言、～を代表して
感謝のことばを捧げる（一、1、一） ○皆様に対して
感謝の念を言い述べる（一、2、一） △協力に対して、努力に対して
感謝の念を捧げる（一、1、一）
感謝の誠を捧げる（一、2、1） ○ここに、心から △業績に対し、勞苦に対し
感謝を言う（一、一、1） ○厚く、來賓の方々に
感謝を捧げる（一、1、1） ○心からの
感謝を表する（一、5、1） ○各位に、この機会に、心からの、特に、衷心より
謝辞とする（一、一、3） ○粗辞ながら
謝辞を言い述べる（1、一、一） ○～を代表して
深謝する（一、一、4） ○終わりに臨み、ここに △苦勞を、心勞を、奮闘を
多謝する（一、一、1） ○終わりに △勞苦を

協賛する

協賛する（1、1、一） ○心から

激励する

激励のことばとする（一、一、4） ○はなはだ簡単ですが △私の
激励のことばを言う（2、一、一） ○一言
激励の辞とする（一、一、2） △私の
励ましのことばを言う（1、一、一） ○一言

捧げる

一文を捧げる（1、一、一） ○靈前に
祭文を捧げる（1、一、一） ○諸靈の前に
誠を捧げる（一、一、1） △深甚なる

賛成する

賛意を表する（1、2、一） ○心から

式辞を言う

式辞とする（一、一、30）

○これをもって、はなはだ簡単であるが、はなはだ粗辞ながら △本日の、私の式辞を言い述べる（3、一、一） ○～を代表して

偲ぶ

偲ぶ（一、1、2） ○ここに △遺徳を、面影を

壮行の辞を言う

壮行の辞とする (一, 一, 1)

拍手を送る (1, 一, 一) ○心から, ~に対して
はなむけのことばとする (一, 1, 4)

○一言, 心からの, はなはだ簡単だが △壮途の
はなむけのことばを言う (1, 一, 一) ○一言

送別する

告別のことばを言う (1, 一, 一) ○謹んで

送別のことばとする (一, 一, 1) ○意を尽くさないが

別れのことばとする (一, 一, 4)

永遠の別れを言う (一, 1, 一) ○ここに, 心から

讃える

慶贊のことばとする (一, 一, 1)

贊辞を捧げる (一, 1, 一) △心労に対して

贊辞を表する (一, 1, 一) ○心から

称賛する (一, 一, 1) ○衷心から △手柄を

讃える (一, 4, 7)

○終わりに, ここに, 心から, 最後に, わずかに, ただわずかに △偉業を, 遺
功を, 業績を, 勲功を, 功績を, 功德を, 高德を, 功労を

誓う

誓う (1, 11, 7)

○固く, ここに, 諸霊の前に, 謹んで, とともに △前進することを, 闘い抜くこ
とを, 尽くすことを, 努力することを, 努力を, 努力を尽くすことを, ~するこ
とを

伝達する

伝達する (1, 1, 一) ○ここに, ただいま, 皆様方に対し △委嘱状を

同情する

同情する (一, 1, 一) ○心から

ぬかづく

ぬかづく (1, 一, 1) ○ここに, 霊前に, ~にあたり

願う

懇願する (一, 1, 1)

○伏して △援助を受けるよう, 指導を受けるよう, 鞭撻を受けるよう

願いを言う (一, 4, 8)

○心から, この際 △交誼を受けるよう, 協力を受けるよう, 支援を受けるよう,
指導を受けるよう, 精励してくれるよう, 引き立てをこうむるよう, 鞭撻を受け

るよう

願いを述べる（一，一，1）

願う（3，84，204）

○終わりに，重ねて，心から，この機会を借りて，この時にあたり，これまでに引き続き，くれぐれも，最後に，成績を挙げてもらうよう，切に，衷心より，謹んで，どうか，なにとぞ，ひたすら，ひとえに，伏して，よろしく △骨折りを，援助を，援助を受けるよう，加護を，加護を受けることを，活動に資するよう，活用してくれるよう，活躍することを，活躍を，敢闘を展開するよう，完璧を期するよう，管理を，期待に答えるよう，議決を受けるよう，協力あらんことを，協力してくれるよう，協力のほどを，協力を受けるよう，研さんを，交誼を受けるよう，向上に資するよう，向上を期するよう，貢献してくれるよう，厚情を受けるよう，支援を（受けるよう），支持を，実現してもらうよう，実現を期してもらうよう，指導あらんことを，指導を，助力を受けるよう，精進あらんことを，精進してくれるよう，精進を，精進を積むことを，承認を受けるよう，審議を，尽すいを受けるよう，尽力あらんことを，尽力してくれるよう，尽力することを，尽力を受けるよう，推進してくれるよう，推進に寄与するよう，声援を，清聴を，促進に寄与するよう，力添えを（受けるよう），努力してくれるよう，努力をすることを，配慮を，発展に寄与するよう，万全を期してくれるよう，鞭撻を（受けるよう），便宜を図ってくれるよう，方途を講じてくれるよう，導いてくれるよう，導きを，友情を受けるよう，理解を，留意してくれるよう，了解を，～してくれるよう，～するよう，～を身につけるよう

願ってやまない（一，2，一） ○衷心より △貢献するよう

念願してやまない（一，7，一）

○心から，切に △意義の深いものにしてもらうよう，活動を展開するよう，協力あらんことを，尽すいあらんことを，水準を高めることを，負託に答えることを，～を

念願する（一，11，50）

○終わりに，終わりにあたり，終わりに臨み，心から，切に，衷心より，～に当たり △愛されることを，相まみえることを，生かされるよう，活躍してくれるよう，議会の付託に答えたいと，寄与するに至るよう，協力を，結論を得られるよう，健康を，貢献するよう，貢献することを，向上に資するよう，支援を，精進してくれるよう，職責を遂行したいと，進展に寄与するよう，進展をもたらすことを，進展をもたらすよう，真に光輝あらしめるよう，信頼に答えたいと，尽力してくれるよう，尽力を受けるよう，盛会裏に終了するよう，成果を収めるよう，成長を遂げるよう，前進するよう，促進するよう，礎石を築き上げたいと，徹底を期するよう，到達することを，到着するよう，努力を払うことを，努力を

重ねるよう、発展あらんことを、発展するよう、発展することを、発展に寄与することを、発展を、発展を遂げるよう、繁栄に寄与できるよう、目的を達成するよう、目的を達成するに至るよう、役割を果たすことを、有終の美を収めるよう、優勝の栄を勝ち取ることを、利用することを、留意するよう、～を

望む

希望する（一，8，6）

○心から、切に △開催することを、期待に答えることを、健闘することを、精進するよう、成長することを、精励することを、育てるよう、力を尽くすよう、努力を、努力を払うことを、熱意を、励むことを、目的を達成するよう

希望を述べる（一，一，1）

切望してやまない（一，2，一）

△貢献するに至ることを、発展を遂げるよう

切望する（一，8，12）

△格段の配慮を、活躍あらんことを、協力を、向上に寄与することを、支援を、使命を完了することを、精進してくれるよう、精進することを、精励することを、努めることを、努力を重ねるよう、努力を傾けるよう、励むよう、発展することを、発展に寄与することを、発展に貢献することを、まい進することを、理解を

熱望する（一，一，1） △まい進するよう

望む（一，2，1） ○切に △格段の配慮を、信託に答えることを

望んでやまない（一，1，一） △協力することを

要望してやまない（一，1，一） ○強く △反映されることを

要望する（一，1，一） ○強く △反映されるよう

拝察する

拝察する（一，1，一） △～と

表彰する

顕彰する（一，一，1） △功績を

表彰する（一，2，一） ○ここに

披露する

披露する（一，一，1） △～を

閉会の辞を言う

閉会のことばとする（一，一，2） ○まことに簡単だが

報告する

報告する（1，一，一） ○この際

約束する

約束する（一，一，3） △建設することを、好意に答えることを、努力することを

喜ぶ

喜びのことばとする (一, 一, 2) △本日の、私の

喜びのことばにかえる (一, 一, 1) △私の

喜びのことばを送る (1, 一, 一) ○ここに、一言

喜びのことばを捧げる (1, 一, 一) ○心から

喜びを言う (6, 2, 一) ○心から、謹んで、一言、皆さん方に、～を代表して
喜ぶ (14, 28, 4)

○心から、衷心より、ともに、何よりと、まことに時宜を得たものと、まずもって、皆様とともに △榮譽を、慶典を、健勝を、式典を、盛況を、壮途を、卒業を、誕生を、発展を、～したことを、～を

礼する

礼する (40, 66, 34)

○厚く、改めて、終わりに、終わりに臨み、各位に対し、重ねて、ここに、心から、この機会に、この機会を借りて、この際、この席を借りて、この場を借りて、最後に、衷心より、謹んで、本席を借りて、まずもって、～として、～を代表して △援助の賜物と、協力を、協力を受けて、協力を得たことを、苦勞に対し、好意に対し、貢献をうけていることを、功績に、高配に対し、厚情に対し、懇情に対し、参加を受け、支援に、招待の榮に浴し、招待の榮を受け、出席を受けて、尽力を受け、世話になったことも、努力に、認定を受けたことを、任務を果し得たことにつき、臨席を受けて、煩わすことに、～したことを、～に対して

礼のことばとする (一, 一, 7)

○意を尽くさないが、心からの、まことに (はなはだ) 簡単だが

礼のことばにかえる (一, 一, 2) ○まことに簡易で恐れ入るが

礼のことばを言う (6, 一, 一) ○一言

礼を言い述べる (一, 一, 1) ○一言

礼を言う (11, 34, 14)

○厚く、改めて、終わりに当たり、終わりに望み、重ねて、ここに、心からの、この機会を借りて、この席から、この席を借りて、衷心より、謹んで、深く、まずもって、～として、～に代って △活躍してもらっていることに、協力に対し、協力を受け、好意に対し、厚情に、支援に対し、指導に対し、指導の賜物であると、出席を受けたことを、審査をうけ、世話になり、努力してもらったことを、努力に対し、配慮につき、鞭撻の賜物であると、芳情に対し、臨席を受け

詫びる

詫びる (1, 2, 1)

○率直に、深く △無礼に対し、迷惑をかけたことを、～を

詫びを言う (1, 1, 1) ○幾重にも、この点は、深く

表2 連体修飾句の中に現れた動詞(句)とその修飾要素

あいさつする

あいさつする(6, 一, 一)

○案内に接し, ここに, 招待の榮に浴し, 謹んで, 本日, 皆様方に, ~として
あいさつを言う(9, 一, 一)

○ここに, 招待の榮に浴し, 一言, 本日, 皆様方に, ~に当たり

あいさつを言い述べる(4, 一, 一) ○本日, ここに, 一言, ~として

祝う

祝いのことばをいい述べる(4, 一, 一) ○一言, 本日ここに, ~として

祝いのことばを言う(26, 一, 一)

○一言, 本日ここに, 招きにあずかり, 招きの榮に浴し, 列席の榮に浴し, ~に
当たり

祝いのことばを述べる(2, 一, 一) ○本日

祝いを言い述べる(2, 一, 一) ○本日ここに, ~にあたり

祝いを言う(14, 一, 一)

○一言, 謹んで, 本日ここに, 皆様方に, ~に当たり, ~を代表して

祝う(2, 一, 一) ○ここに, 皆様と共に △発展を, 繁栄を

祝辞(祝詞)をいい述べる(3, 一, 一) ○ここに, 一言, 本日, ~を代表して
祝辞(祝詞)を言う(7, 一, 一)

○本日ここに, 招きにあずかり, 招きをうけ, 礼をかね, ~として, ~に列席し
て, ~を代表して

祝辞を述べる(2, 一, 一) ○一言, 本日ここに

祝福する(1, 一, 一) ○本日ここに, ~と共に

披露する

披露する(1, 一, 一) ○各位に, 本日ここに

礼する

礼を言う(1, 一, 一)

表3 「宣言・決議・要望」の中に現れた動詞(句)とその修飾要素

訴える

訴える(一, 一, 1) △前進させることを

感謝する

謝意を表する(1, 1, 一) ○改めて, 衷心から

決議する

決議する(一, 1, 20)

○以上、ここに、上記のとおり、総意をもって、本日ここに、右 △以下の～を、
要望事項を

宣言する

宣言する (2, 5, 28)

○以上のとおり、ここに、内外に、本大会の名において、右、よってここに、～
と共に △決意を、～として、～とすることを、～を

誓う

誓う (1, 6, 3)

○ここに、もって、われわれは △一路まい進せんことを、活動を展開すること
を、期待に答えることを、行動を開始することを、全力を尽くすことを、努力を
払うことを、負託に答えることを、目的達成に努力することを、目的を達成する
ことを、理想を達成することを、～することを

願う

願う (一, 一, 1) △特別の配慮をもらうよう

念願する (一, 1, 一) △恒久平和の樹立を

表彰する

表彰する (一, 一, 1) ○議決をもって △これを

要望する

要望する (一, 5, 3)

○強く、もって △格段の配慮をするよう、実施を、絶滅を期するよう、即時実
現を、措置を講ずるよう、～することを

要望を言う (一, 1, 一)

いずれの表においても次の処理をして整理した。

- ① 表す言語行動としての意味によって、具体的な動詞を言語行動の種類に分類した。たとえば、具体的な動詞「あいさつする／あいさつと
する／あいさつにかえる／あいさつを言う／あいさつを終わる」を
「あいさつする」にまとめる、など。この場合の言語行動の種類を表
す語は「願う／望む／祝う／礼する」など、できるだけ簡潔な形の動
詞を選んだ。表の左端に見出しとして並べた。
- ② 具体的な動詞（句）は、実際に採集された形から丁寧（です／ます）
・謙譲（申す／申上げる／いたす）などの敬語的要素をすべて省いて
動詞（句）の姿を示した。なお実際の出現形「ごあいさつ申し上げま

す」は「あいさつする」に、「ごあいさつを申し上げます」は「あいさつを言う」に置き換えた（双方とも言語行動の種類としては「あいさつする」にまとめた）。助詞の有無を区別したのである。左端から2字分下げて列挙した。

- ③ 具体的な動詞（句）がそれぞれ、どのような連用修飾要素（副詞など）に修飾されていたか、またどのような目的要素（やや広義に考え、行動の内容も含めた）を支配していたか、についてのバラエティを示した。連用修飾要素の群の先頭に○印、目的要素・行動内容の群の先頭には△印を付けた。連用修飾要素はできるだけそのままの形で、また目的要素・行動内容は敬語的要素を省いて、それぞれの異なりだけを列挙した。個別的な内容（固有名詞など）は～で省略した。
- ④ 言語行動の種類の見出し、具体的な動詞（句）の見出し、連用修飾要素、目的要素などの配列は、それぞれの中で50音順とした。
- ⑤ 動詞（句）見出しの直後に添えた括弧内の数字については後述する（3.5. 参照）。

表1では、言語行動の種類で分類したグループが34、具体的な動詞（句）が150種類を数えた。このうち、ここでグループ化した言語行動の種類は、資料とした各種のあいさつにおいてどのような種類の言語行動がなされたのかを知る明示的な指標となるものである。その言語行動としての内容的なバラエティは、もともとの資料にどのような種類のあいさつ例が集録されていたかによるわけで、そのこと自体は、日本語社会のあいさつ行動全般のなんらかの特徴を示すものではないだろう。しかし、公的な場面でのあいさつというものが、どんな種類の言語行動として（換言すればどのような趣旨で）行われるものであるかを知る手がかりとして見ると、興味深い広がりを示している。

具体的な動詞（句）のレベルでの言語形式上の特徴を見るために、動詞（句）の末尾の型を分類して、それぞれの型が言語行動の種類グループとしていくつに現れたかを数えた。括弧内が言語行動の種類グループ数で

ある。

- ① ～する (26)
- ② ～のことばを言う (いい述べる／述べる) (17)
- ③ ～のことばとする (15)
- ④ ～を捧げる (9)
- ⑤ ～の意を表する (7)
- ⑥ ～のことばにかえる (4)
- ⑦ ～してやまない (2)
- ⑧ ～を終わる (1)

これらのほかに「敬意を払う／拍手をおくる／ことばをおくる／長逝を惜しむ」などが言語行動の種類としては個別的なものに慣用的な表現として現れている。⑦「～してやまない」は今回の資料では「願う／望む」の2種類だけに、⑧「～を終わる」は「あいさつする」だけにしか現れなかったが、これらは可能性としては他の種類の言語行動にも現れ得る動詞形式だろうと思われる。

ここに整理されたいくつかの形式のうち、①「～する」という単純な動詞形式を除くと、②以下の全ては、語義的な意味としてはとくに付け加わるところがない、いわゆる文体的な意味を添えるレトリカルな言い回しが並んでいることが注目される。ふだんのことばであればそのような言わず単純・平易な動詞形式によるであろう内容を、公的なあいさつ場面では、ここに並んだような、文語的な表現（捧げる／意を表する／やまない、など）を含むあらたまった言い回しを選択する、という姿が観察されるのである。これは動詞（句）そのものの末尾の形についての指摘であるが、これと同様のことは、のちにみるメタ言語表現全体としての文末表現についても指摘される。あいさつ場面での言語形式の選択に対して、冒頭に指摘したような場面としてのあらたまり性の影響が及んだ姿であろう。

ちなみに、前稿で検討した学術的専門文章でのメタ動詞には、いわゆる謝辞などの儀礼的（つまりあいさつ的）な場合を除くと、このようなレトリカ

ルな動詞形式は「稿を閉じる／補綴を試みる」などきわめてまれにしか見られなかった。専門的文章でのメタ言語表現が、前稿でも指摘したように内容や論旨のわかりやすさを支えることに主眼を置いた素材中心の性格をもつことを裏から示す事実であろう。これに対して、あいさつというきわめて対人的な言語行動においては、場面のあらたまりへの配慮を初めとした広義の対人配慮性が言語形式の選択に色濃く現れたと言える。

表2は文末でなく「こと」にかかる連体修飾句に現れた動詞（句）であるが、ここに並ぶ言語行動の種類と具体的な動詞は、文末に現れたもの（表1）と重なっていて、文法的な環境による差異は見られないと言ってよい。

一方、表3に別扱いした「宣言」その他の群に現れた動詞は、表1、表2にも現れていたものももちろん含まれるが、「決議する／宣言する／要望する」などこの群だけのものがあるが注意される。この種の言語行動においてメタ言語表現が行われるのは文字通り定型と言ってよい（「……右、宣言する／……ことをここに決議する／……されるよう強く要望する」など）。そうしたメタ言語表現に用いられる動詞がほかの一般的なあいさつには現れないことは、一旦この種の動詞をメタ言語表現として発してしまうと、その言語行動全体を「宣言／決議／要望」と性格づけることに直結する、つまり単なるあいさつにとどまらなくしてしまうという事情と関連があるのだろう。一般的なあいさつや式辞などとは基本的に異なる（前に述べたように、直接の相手が大きく異なる）ことを示すマークとしての機能をこうした動詞に認めてもよいと考える。

3.2. 動詞（句）の修飾要素と目的要素

表1～表3に○印で示したのは動詞を修飾する副詞などの連用修飾要素だが、これらは次のような分類ができる。

- ① 当該のメタ言語表現が言及する言語行動の、あいさつの中での位置を表す

「以上／以下に／はじめに／次に／終わりに」など

- ② 言語行動をおこなっているその時（時機、タイミング）を説明する

「この機会に／～にのぞみ／～にあたり／～に際して」など

- ③ 言語行動の様態（行い方，量，調子，他との関連，など）を説明する

「あわせて／かさねて／一言／特に／深く／あらためて」など

- ④ 言語行動をめぐる謙遜・いいわけ・注釈などの前置き

「簡単だが／粗辞だが／意を尽くさないが／許しを得たので／～を代表して」など

- ⑤ 言語行動の主体の態度や姿勢を説明する

「心から／切に／謹んで／衷心より／神かけて／尽きぬ名残を込めて」など

前稿ではこのうち①の類がほとんどで，②以降のものはまれであった。①は言及される言語行動が論文やあいさつの中のどの位置で，どんな脈絡において起こるかを明示的に説明するものである。論文やあいさつの内容的な構造や展開を整理して理解しやすく説明する働きをもつものと言える。これに対して②，③の類は，あいさつをしている今という時やあいさつの述べ方（様態）を説明するものであって，これ自体に，あいさつの内容の分りやすさを支える①のような機能は認めにくく，むしろ定型化した一つの格調を備えることによって話し手のあらたまった姿勢を表現するものと考えべきだろう。④，⑤の類も，言語行動に際しての話し手のいろいろな心的態度に言及することによって，やはり聞き手への対人的な配慮を表現していると解釈できよう。いずれも，前に指摘した動詞そのものの形式と同様，あいさつのあらたまり性を反映し，支える言語使用だと考える。

△印で列举した動詞（句）の目的要素ないし動作内容には，あいさつの個別性に由来していわば千差万別の内容が並んだと言える。このうち，用例の比較的多かった言語行動の種類グループで特徴的な点を指摘すると次のようになる。

- ① 「あいさつする」には「祝いの／喜びの／就任の／お礼の／年頭の」などのようにあいさつの言語行動の内容を「～の」という形で表す要

素が多く並んでいる。

- ② 「祝う／喜ぶ」には「榮譽を／式典を／誕生を／盛會を／メーデーを／～することを」など動作の対象が「～を」の形で多く並ぶ。
- ③ 「祈る／願う／望む」には「精進されるよう／支援を受けるよう／目的を達成するよう」など動作の内容が「～よう（に）」の形で多く並ぶ。
- ④ 「敬う／感謝する」には「協力に対して／業績に対して／支援に／卓見に」など動作の対象が「～に／～に対して」の形で多く並ぶ。

これらはいずれも厳密に限定された現れではなく、目立った傾向というべきものであるが、このように整理して見るとそこには公的なあいさつの文言の定型性がたしかに観察されると言ってもよい。そうした定型性がメタ言語表現の動詞句の構造について指摘できることにここでは留意しておきたい。

3.3. メタ言語表現の現れる頻度

前述のように、763のあいさつ例に2,801のメタ言語表現が現れた。一つのあいさつ例には単純平均して3～4個のメタ言語表現が現れたことになる。日常の会話などの常識的な感覚をもとにして考えれば決して少ない数値でないというべきだろう。この頻度を多いと見るか少ないと見るかについては、ほかのジャンルの言語行動・言語作品を広く検討して比較データを蓄積するまで保留とすべきである。前稿の専門的文章も含めて、ほかのジャンルと比較する作業では、作品としての長さの違いを考慮に入れることはもちろん、その中で「いくつの言語行動がなされているか」というメタ言語表現の言及対象のことがらの量を重要な規準にしなくてはならないはずである。

一つのあいさつ例の中にくりかえし現れる場合も含めた出現状況を言語行動の種類ごとに検討するために作成したのが表4である。たとえば、「あいさつする」に属するメタ言語表現は延べ442例現れたが、それが1度だけ現れたあいさつ例は160、2度現れたのが138（メタ言語表現の数では倍の276）、3度が2（メタ言語表現の数は6）という内訳であったことを示している。なお、この度数は文末位置に現れた例（表1）と文の主節・目的節を構成す

る「こと」にかかる連体修飾句に現れた例（表2）とを合算してある。

表4を見ると、一つのあいさつ例に同じ種類の言語行動のメタ言語表現が1度だけ出現するタイプと、2度以上出現することの多いタイプと、言語行

表4 同じ種類のメタ言語表現のくりかえし状況（あいさつ例単位）

	メタ表現 用例数	出現回数				あいさつ 例数 計
		1回	2回	3回	4回	
あいさつする	(442)	160	138	2		300
言う	(53)	37	3	2	1	43
悼む	(48)	8	14	4		26
祈る	(337)	286	24	1		311
慰霊する	(5)	1	2			3
祝う	(640)	122	162	58	5	347
訴える	(2)	2				2
敬う	(243)	207	18			225
歓迎する	(11)	5	3			8
感謝する	(199)	168	11	3		182
協賛する	(2)	2				2
激励する	(9)	5	2			7
捧げる	(3)	3				3
賛成する	(3)	3				3
式辞を言う	(33)	33				33
偲ぶ	(3)	3				3
壮行の辞を言う	(8)	4	2			6
送別する	(7)	5	1			6
讃える	(15)	15				15
誓う	(19)	19				19
伝達する	(2)	2				2
同情する	(1)	1				1
ぬかづく	(2)	2				2
願う	(376)	267	44	7		318
望む	(44)	40	2			42
拝察する	(1)	1				1
表彰する	(3)	3				3
披露する	(2)	2				2
閉会の辞を言う	(2)	2				2
報告する	(1)	1				1
約束する	(3)	3				3
喜ぶ	(59)	57	1			58
礼する	(216)	142	25	8		175
詫びる	(7)	7				7

動の種類が大別できる。2度以上出現することが目立つのは、「あいさつする／祝う／願う／礼する」の4種類である。とくに「祝う」は1度だけのあいさつ例が122であったのに、2度がこれを上回る162、さらに3度現れたあいさつ例も58にのぼっている。「あいさつする」は「祝う」ほどでないにしても、メタ言語表現そのものの数で言えば、2度現れたあいさつ例の中でカウントされた例のほうがはるかに多いことは、「祝う」と同じである。

こうした事例は具体的には次のような構造をしている。括弧内に資料での実例番号とその標題を添えて引用する。

「本日、ここに〇〇連合会総会を開催されるにあたり、会場市の市長として、はなはだ僭越ではありますが一言ごあいさつを申し上げます。あらためて申し上げるまでもなく……（中略）……終わりに、皆様がたの多年のご心労に感謝し、いっそうのご多幸をお祈りいたしまして、はなはだ簡単ではございますがあいさつといたします。」

（254『都市選挙管理委員連合会総会祝辞』）

「A市・B町合併祝賀式を挙行されるにあたり、県議会を代表して一言お祝いを申し上げます。A市は、〇年に……（中略）……合併の実現を見るに至りましたことは、地方自治の拡充強化と住民福祉増進のためまことに喜ばしく、本日の祝賀式を心からお祝いを申し上げますとともに、両市町関係各位の……（中略）……・大A市がますますめざましい発展を遂げられますことを祈念して、お祝いのことばといたします。」

（251『町村合併祝賀式辞』）

すなわち、一つのあいさつ例に同一のメタ言語表現が2回登場する場合は、前者の例がそうであるように、あいさつの冒頭で今から始めるあいさつの言語行動の種類を説明して1度、末尾でそこまでに続けた言語行動の種類を念をおすように言及してもう1度、という現れ方がその典型である。さらに3回以上登場する場合には、後者の例がそうであるように、冒頭と末尾の2回に加えて、中間のあいさつ本体の部分で実質的な内容との関わりでメタ言語表現が現れるというパターンが定型として認められるのである。

一つのあいさつ例に1度しか現れない種類に共通の特徴があるのかどうかはいまのところははっきりしない。行動そのものの性格、たとえば祝儀と不祝儀（「悼む」など）、肯定的・否定的（「詫びる」など）などによって繰り返して言いやすいものとそうでないものがあるわけでもなさそうである。おそらく、あいさつそのものの時間的な長さ、あいさつに含まれる言語行動のまとまりの数量、その場のあらたまりの程度といった言語外的な条件が働いて、メタ言語表現をどの程度採用するかというあいさつの形式性の選択がなされるのだと考えられる。基本的には、メタ言語表現が繰り返されればあらたまった形のあいさつが整う方向に向かうと考えてよいと思われるが、このあたりのメカニズムは今後の検討課題である。

3.4. メタ言語表現の文末

収集した用例の現れる文法的な環境は大別すると3種類である。

- ① 通常の言い切りの文末位置（「ここにひとことごあいさつ申し上げます。」など）
- ② 連用形中止「～し」あるいは接続要素「て」「とともに」などに先立つ並立文の文末（「お礼を申し上げ、お別れのことばにかえさせていただきます。」「お祈りいたしまして、ごあいさついたします。」「お慶び申し上げるとともに、今後のご発展をお祈り申し上げます。」の下線部）
- ③ 主節ないし目的節を構成する「こと」にかかる連体修飾句の中（「ごあいさつ申上げることはまことに光栄なことでございます」「ご報告申上げる機会を得ましたことをありがたく存じております。」など）

このうち①と②が大半を占めていて、③は少数（84例）である。

表5にはこうした文末表現の具体的な現れを整理して一覧した。②連用形中止や接続要素に先立つ場合も①通常の文末と一緒にまとめて扱い、それらの文末が助動詞その他の補助用言など、どのような形式で構成されているかを分類した。また①、②の文末のバラエティそれぞれに、さらに後続する形で

「～次第である」という定型的な表現も相当数現れた。これも文末の表現類型としては重要なものであると考えて、表5では別の欄に分けて示した。③に分類した「こと」に続く主節・目的節の連体修飾句に現れた例は、それらと区別して表5の右端に示した。

いずれも実際の用例では、文末に補助動詞や助動詞による敬語的な要素が付加されて相当に丁寧な表現になっているのが（別扱いした「宣言・決議・要望」類を除いて）一般であるが、表5ではそうした敬語的な要素はすべて省いた形で見出しを立てた。

例 <見出し>

<実際の形>

～する： 「ごあいさつ申し上げます。／お祈りいたします。／お祝い申し上げまして～」など

～とする： 「お祝いのごあいさつといたします。」など

～した次第である： 「ごあいさつ申し上げた次第でございます。」など

～する機会を得たこと： 「お祝いのことばを申し上げる機会を得ましたことは、～」など

表5を見ると問題のメタ言語表現がその文末形式においていくつかの特徴を持っていることがわかる。

圧倒的に多いのが「～する」という形である。実際には丁寧・謙譲などの敬語的要素が付加されたものだが、それを除いて考えれば動詞の終止形だけが抽出できる形式である。これには「～し、……」「～して、……」「～するとともに……」などの形で後ろの並立文に接続するものも多く含んでいる。これらに次いで多いのが「～とする」（「あいさつとします／お祝いのごことばといたします」など）の形である。この形は、のちに（3.5. および3.6.）見るように、あいさつの末尾の部分に、それも「お礼を申し上げて、ごあいさつといたします／ご健康をお祈りして送別のごことばとします」などのような複数のメタ言語表現が重層的に続く構造の後部に現れることが多い文末形式である。「～する」と「～とする」の両者で総計2,100を越え、全用例の約4分の3に達する。

表5 メタ言語表現の文末表現（数字は用例数。括弧内は内数。）

[あいさつ・式辞・祝辞] 類

	用例数	文 末 (敬語要素を除いた形)	～次第である(他)	主節の中の連体的用法
～する系	2088	～する (1525) ～するものである(146) ～した (2) ～するところである(2) ～するのである (1) ～することとする (1) ～するわけである (1) ～するのみである (1)	～する次第である(320) ～した次第である (2) ～することとした 次第である (2) ～することとなった 次第である (1) ～する光栄に浴す (1)	～する機会を 得たこと (49) ～すること (19) ～することが できること (6) ～できること (3) ～する機会を 与えられたこと (3) ～する光栄に 浴したこと (1) ～する機会を もらったこと (1) ～し得ること(1)
～とする系	610	～とする (610)		
～したい・ ～しよう系	39	～したいと思う (37) ～したい (1) ～しようと思う (1)		
～させて もらう系	37	～させてもらう (35) ～させてもらいたい と思う (2)		
～している系	13	～している (4) ～しているもので ある (1) ～している ところである (1) ～してきたところで ある (1)	～している次第で ある (6)	
～して やまない系	13	～してやまない (5) ～してやまない ものである (3)	～してやまない 次第である (5)	
～しておく系		～しておきたいので ある (1)		
	2801	(2381)	(337)	(83)

[宣言・決議・要望] 類 81例

～する系 ～する(67) ～するものである(8) ～する次第である(4) ～した(1)
～している系 ～している(1)

この両者が、動詞の終止形を抽出できるという意味ではいわば基本形であるのに対して、これ以外の文末形式は、いろいろな補助的要素が付加されたものであって応用形とでもいうべき変種である。そして、その応用形の中には「～させてもらう」という待遇表現としての補助用言でへりくだりや丁寧さを表したり、「～したい／～しようと思う」など助動詞で意志や希望のモダリティを表したりするもののほか、それぞれ度数は少ないものが多いものの、文体的な表現効果として表現にあらたまりや格調を添える機能をもつというべき文末形式を備えたものがいくつも並ぶ。146例にのぼる「～するものである」をはじめとして、「～するところである／～しているところである／～してやまない」などは、いずれもこうしたレトリカルな意図から採用された形式だと考えられる。

別欄に列挙した「～次第である」の系列の文末形式も上と同様のレトリカルな配慮から付加されたものだろう。この系列が全部で337例と1割を越える相当数に達している（うち1例だけが「～する光榮に浴す」という、これもレトリカルな表現である）のは留意してよい。

「こと」へ続く連体修飾句での現れも、「～すること」（19例）という基本形のほかは、「～する機会を得た／～する機会を与えられた／～する機会をもらった／～する光榮に浴した」などの、やはりレトリカルな応用形の形式がむしろ多数派である。

応用形と呼んだ形式がもつ文体的な表現効果は、3.1.で中心的な動詞そのもののバラエティについて指摘したものと同様の内容を考えてよいだろう。ひとことで言えば表現にあらたまりを添える働きであり、繰り返すことになるがあいさつ場面のあらたまり性への配慮がメタ言語表現の文末形式のこうしたレトリカルな選択にも色濃く現れたと考えるのである。

前稿で専門的文章に関して指摘したことに、「意志・希望」を表す明示的な文末要素を伴うメタ言語表現が多いということがあった（冒頭の箇条の(2)）。この点で、今回のあいさつ資料は対照的な状況を示した。表5に見るように「～したい／～しよう」の系列は最下欄の「～しておきたいのである」も含

めてもわずかに40例にとどまる。のちに出現位置を検討するところで示されるように、あいさつの冒頭で今から述べようとする言語行動の種類をいわば宣言するようなメタ言語表現は決して少なくない。そこでは「～したい／～しようと思う」という明示的な形で意志や希望が述べられて不思議でないのにもかかわらず、それを明示的に表現することはまれであるというのである。そこに、自らの意思をあからさまに表現することを避ける配慮が認められるとすれば、これもまた、あいさつの場面のあらたまった性格が「つつしんだ」「控え目の」表現を選ばせたことの現れと解釈することができるだろう。資料からは省略した敬語要素のうち、「～いたします」や「～させていただきます」という謙譲表現が文末に多出していることもこの解釈を支える。

表5では、メタ言語表現の時制についての状況も注意される。すなわち、「た」という過去を明示する文末要素を含む例がきわめてわずかなのである。「～した／～することとした次第である／～することとなった次第である／～してきたところである」の総計4例である。さらに、このうち「～次第である／～ところである」はメタ言語表現の文末自体は「た」の付かない形である。これも、のちに出現位置を検討するところで示すが、あいさつの末尾で「以上、ごあいさつ申し上げます」などのように、そこまで続けた言語行動の種類を念をおすように言及するパターンはきわめて普通であって多数の例が見られる。それらも「以上、ごあいさつ申し上げました」でなく、「た」の付かない形で表現されるのが一般だということになる。積極的な説明としてどのようなことがらが可能であるのか今はなお十分でない。今後の課題としておきたい。

表5の下欄に付記した「宣言・決議・要望」の類の文末形式については、とくに指摘すべき特徴はない。ただし、資料からは省いた敬語的な要素について、この類はそれが付かない形で出現することが多いことが注意される。「ここに宣言する。／右、決議する。／以上、つよく要望する。」など、81例中、70例が丁寧・謙譲要素なしであった。これは、話題とすることがらの内容が、たとえば行動の主体と相手との間の何らかの緊張関係を前提にし

たものであるなど、言語形式に関係することは十分に考えられるし、前に指摘したように、その言語行動の実質的な（直接の）相手は、その宣言などが読上げられた現場の聴衆とは一致しない、世間一般の人や特定の集団であったりすることが多いという事情があって、言語場面的・対者敬語的な敬語が使われにくいという事情が指摘できるだろう。

3.5. メタ言語表現の出現位置

問題のメタ言語表現が、あいさつの中のどのような位置に現れるかを次に検討する。先に示した表1～表3には、具体的な動詞（句）の見出しのそれぞれの直後に括弧に入れて3個の数字を添えた。これは、資料としたあいさつ例の段落（改行して印刷された箇所を区切りとする形式段落）を単位として、問題のメタ言語表現動詞がどこに出現していたかを数えたものである。その際、今回は大まかに概観するため、①最初の段落か、②第2段落から最後の直前段落までの間か、③最後の段落か、の3種類だけを区別し、それぞれを「頭」「中」「尾」と呼ぶこととした。ただし、わずかな例だが、文字通りの冒頭でそのあいさつの本旨とは無関係と思われる自己紹介や時候のあいさつが述べられたのは無視した。それぞれの動詞（句）見出しの括弧には「頭・中・尾」の順に該当する用例数を掲げた。－はゼロを意味する。

動詞（句）単位で出現位置を検討すると、もともとの度数が少なくではっきりした傾向の指摘できないものも多いが、その中である程度の度数をもつ動詞（句）に関しては、次のような点が注目される。

- ① 「～を言う」「～を言い述べる」の形は、「～」が「あいさつ／祝い／祝いのことば」などの例が多いが、これらはあいさつの頭の位置に現れる場合が多い。
- ② 「～とする／～のことばとする／～のことばにかえる」の形は、「～」の言語行動の種類によらず、いずれの場合にも尾の位置に現れる場合が多い。
- ③ 動詞単独の言い切りのうちには、「願う／念願する」のように尾の位置に片寄るものと「礼する／感謝する」のように全体に散らばった

ものがある。

- ④ 「敬意を表する／感謝の意を表する」は、頭や尾にも現れないわけではないが、中の位置が相対的に多い。

こうした出現位置は、3.2. で見た動詞の修飾要素、とくに「ここに／以上／はじめに／次に／おわりに」などの位置や順序にかかわる副詞的な要素と関連が深いことは言うまでもない。前稿でいくつかの動詞と副詞的要素との組み合わせについて検討した結果にもその関連の一部が見えていた。本稿ではこの関連性について数量的な検討はしないが、たとえば上記①の頭の位置に多い「～を言う／～を言い述べる」などには「～の開会にあたり／～の発足にあたり／～の出席に際して」のように「～にあたり／～に際して」という形でそのあいさつが行われる機会・時機そのものに言及する副詞的修飾要素が目立つとか、②の尾の位置の場合には、あいさつそのものの内部での位置に言及する「最後に／締めくくりとして」や言語行動をめぐるいいわけや注釈などの前置きの修飾表現である「まことに簡単だが／はなはだ粗辞だが／意は十分に尽くさないが」などが優勢であるというような傾向を指摘することができる。

メタ言語表現の出現位置はその内容や形との関連からは以上のような特徴を示す。3.3. で一つのあいさつ例に繰り返す出現を検討した際、その出現位置についてあいさつの冒頭・中間・末尾という3種類の定型が観察されることを指摘した。とくに、あいさつの冒頭で今から始めるあいさつの言語行動の種類を説明して1度、末尾でそこまで続けた言語行動の種類を念をおすように言及してもう1度という二つの現れ方は、今回の資料では優勢なものであった。この定型は複数が繰り返す場合についてだけでなく、一つのあいさつに1度だけ現れるメタ言語表現についても該当するといえる。

この3種類の位置に関して、表1と表2の範囲のそれぞれの実例総数は、頭589、中725、尾1487という分布である。尾が全体(2,801例)の半分強、頭と尾で約4分の3ということになる。本稿では第2段落から末尾の直前段落までの広範囲を全部まとめて「中」として扱っている。このことを考慮す

ると、中の位置は、頭・尾にくらべて相対的にまれであると言ってよい。つまり、メタ言語表現が現れるとすれば、あいさつの頭か尾、とくに尾の位置である場合が多いことが指摘できる。注意すべき定型性だろう。

3.6. 1文の中に複合的に出現するメタ言語表現

実例を採取する単位としては別々に数えたのだが、実際には1文の中に複数のメタ言語表現がつながって（複合して）現れる場合も少なくない。たとえば次のようなものである。

「～をお祈りして、ごあいさつといたします。」

「～にお礼を申し上げ、式辞といたします。」

「感謝申し上げますとともに、あわせてお喜びを申し上げる次第です。」

「～をお願いいたしまして、歓迎のごあいさつといたします。」

「敬意と感謝の意を表しまして、お祝いのことばといたします。」

「お礼やらお願いを申し上げまして、私のごあいさつといたします。」

（以上の型，多出）

「……に対し、関係者の一人として深く敬意を表し、厚くお礼を申し上げますとともに、ますますのご健勝、ご繁栄をお祈り申し上げ、あわせて〇〇商工会議所の限りないご発展を心から祈念いたしまして、まことに粗辞であります但本日の祝辞といたします。」

（511『商工会議所創立〇周年並びに会館竣工記念式祝辞』）

こうした複合したメタ言語表現の、その中身となった言語行動の組み合わせはいろいろであるが、それでもいくつかの特徴的な片寄りが指摘できる。ここでは、そのうち二つの観点から見た特徴を見ておく。

第1に、「～し／～して／～とともに」によって並列される二つ以上のメタ言語表現の最後の位置には、文末として「～とする」（実際には「～とします／～といたします」など）の形式をもつものが多い。また、逆に、文末が「～とする」の表現はその前に別のメタ言語表現を「～し／～して／～とともに」を介して先行させていることが多い、ということが指摘できる。後者の事実を示すのが表6である。

表6 文末形式「～とする」に先行するメタ言語表現

[前に出現するメタ表現]

あいさつとする	単独(12), 願う(96), 祈る(75), 礼する(30), 感謝する(19), 祝う(10), 敬う(7), 望む(4), 言う(5), 讃える(1), 披露する(1)
祝いのことばとする	単独(5), 祈る(186), 願う(93), 感謝する(24), 敬う(23), 祝う(19), 望む(10), 礼する(6), 喜ぶ(4), 言う(3), 讃える(2), 歓迎する(2)
式辞とする	単独(1), 願う(16), 祈る(6), 感謝する(5), 礼をする(5), 言う(3), 祝う(1), 望む(1)
追悼のことばとする	祈る(14), 讃える(4), 悼む(4), 偲ぶ(2), 願う(2), 言う(2), ぬかずく(1), 表彰する(1), 捧げる(1)
礼のことばとする	単独(1), 祈る(2), 願う(2), 祝う(2), 敬う(1)
激励のことばとする	祈る(5), 願う(2)
餞のことばとする	祈る(6), 祝う(2)
送別のことばとする	祈る(4), 悼む(2), 讃える(1), 誓う(1)
歓迎のことばとする	願う(2), 祈る(2), 祝う(1)
感謝のことばとする	願う(2), 祈る(1), 約束する(1)
慰霊のことばとする	祈る(2), 言う(2)
閉会のことばとする	願う(1), 礼する(1)
喜びのことばとする	祈る(2), 願う(2), 祝う(1)
所感とする	祈る(1)
慶賛のことばとする	祈る(1), 感謝する(1)

見出しとして並べた「あいさつとする」以下15種類は文末に「～とする」をもつ全てのバラエティである。それぞれの全用例について、その前にどのようなメタ言語表現が先行していたかを、度数の多い順に列挙した。「単独」としたのは、当該の文中にはそのような先行表現がなく見出しのメタ言語表現だけが現れていたケースである。前掲の表4では「～とする」を文末とする用例総数は610であった。表6の各項目の括弧内の度数を足すとこれを大きく越える。これは、上に挙げた実例にもあったように、一つの「～とする」が二つ以上（多い場合には五つとか六つも）の言語行動についてのメタ言語表現を並べて先行させているのを含むからである。

表6の通り、「～とする」の用例610例のうち「単独」で現れたのは計19例でごく少数である。これは、たとえば「以上、まことに簡単であります、ごあいさつといたします」など、あいさつの文字通りの締めくくりに現れた例が大半である。それ以外は、実例数の多かった「あいさつとする」「祝いのことばとする」などを初めとして、ほとんどの場合に同一文中の前方に別のメタ言語表現が先行している。つまり「～して～とする」という文型が一つの定型として記述できるのである。

さらに、この先行するメタ言語表現でもっとも多いのが「願う／祈る」、次いで多いのが「礼する／感謝する」というように、その言語行動の種類にも片寄りがあることも指摘できる。動詞の具体的な形や敬語的な差異を無視すれば、言語行動の結びつきとしては「お祈りしてお祝いのごことばとします」(186例)、「お願いしてごあいさつとします」(96例)、「お願いしてお祝いのごことばとします」(93例)、「お祈りしてごあいさつとします」(75例)という4種類の型が目立って多いケースであることがわかる。

以上のことがらも今回扱うメタ言語表現の定型の一つと考えたい。すなわち、どんな言語行動がどんな言語行動と並行しやすいか、あるいはある言語行動（「～とする」の行動）を構成する要素の一部としての言語行動（先行している行動）にはどんな種類のものが意識されるかという点において、こうした類型ないし片寄りが記述され得るのである。

第2には、類型として「～と～を言う」「～と～の意を表す」というように、一つの動詞に二つ（三つ以上の例は今回はなかった）の言語行動を表す動作性名詞がかかっていくという文型が目立つ。これは今回収集した範囲では51例だけであったから、それほどいろいろな例がたくさんあったわけではない。言語行動の種類レベルでの現れを、その先後関係も考慮した組み合わせとして整理すると表7ようになった。表の縦が先の位置、横が後の位置であるから、たとえば「感謝と敬意を表します」が7例、逆順の「敬意と感謝を表します」が22例、それぞれ現れたことを示している。

表7 二つの言語行動の結びつき

後 先	感謝	敬意	お礼	お祝い	お願い	挨拶	歓迎	励まし	賛辞	お喜び	希望
感謝		7									
敬意	22			3							
お礼					3	2					
お祝い	1		6				1	1			
お願い											
挨拶											
歓迎				1							
励まし											
賛辞		2									
お喜び				1							
希望					1						

表7では次のことが指摘できる。

- ① 「感謝」と「敬意」の組合わせが目立って多いなかで、
- ② その場合に「敬意」が先行するケースが多いこと。
- ③ 用例数は少ない中ながら、「お礼／お祝い」は先・後の位置それぞれ用例が収集できたのに対して、
- ④ 「お願い／あいさつ／励まし」は先位置の例がなく、
- ⑤ 逆に「賛辞／お喜び／希望」は後位置の例がないという片寄りが見られたこと。

収集範囲を充分に拡張しないと確かなことは言えないが、こうした文型のなかでの言語行動の結びつきにも定型性が記述できる可能性はあると考えられる。

3.7. 「直接表現」との関係

あいさつの実例の中には、メタ言語表現の言及する言語行動そのものを直接的に表現した文（ここでは「直接表現」と呼ぶ）を含むものも見られる。ここで言う「直接表現」の例を、当該の言語行動とそのメタ言語表現と並べて列挙すれば次のようになる。

言語行動	言語表現例（今回の事例ではない）
新年のあいさつ	メタ言語表現 「新年のあいさつを申し上げます。」
	直接表現 「明けましておめでとうございます。」
謝礼	メタ言語表現 「あつくお礼申上げる次第です。」
	直接表現 「まことにありがとうございました。」
祝い	メタ言語表現 「お祝いのことばといたします。」
	直接表現 「(ご受章) おめでとうございます。」
願い	メタ言語表現 「ここに心からお願い致す次第です。」
	直接表現 「どうかご理解ください。」
祈り	メタ言語表現 「謹んでお祈りいたします。」
	直接表現 「どうか安らかにお眠りください。」

このように「直接表現」は文の種類で言えば、あいさつや謝礼などの場合の広義の感嘆文、願いや祈りなどの場合の希求文とか要求文と呼ばれる文が中心となる。それぞれの言語行動をその相手に向けて直接的に表出する姿勢をもった表現と言えると考えると「直接表現」と呼ぶ。メタ言語表現が、いわばその言語行動を説明的に表現するのとの対比を考えるのである。なお、たとえば「お元気でお帰りいただきますようお祈りいたします／微力を傾けることをここに誓いいたします」のように、「～ように／～ことを」などの要素を介してメタ言語表現の目的・内容を意味する連用修飾要素の中に、この直接表現の表現内容に重なるものが現れることが多いが、ここではそれを直接表現には含めない。まとまった文の形で言い切られたものだけを採用した。

今回の資料の範囲では、この直接表現が現れたケースはそれほど多くない。言語行動の種類で言えば「あいさつする／祝う／礼する／喜ぶ」にそれぞれ複数の例が見られた（連体修飾句の中の例も含む数値で示す）。これらは、直接表現がメタ言語表現の前に現れた場合と、逆の位置で現れた場合とがあり、実例数の多かった三つの言語行動のうち「祝う」と「あいさつする」「礼する」はこの順序に関して対照的であった。

表 8 直接表現の現れと、メタ言語表現との先後関係

	用例数	直接表現あり	(直接表現が先行／メタ表現が先行)		
祝う	640	62	(59	3)
あいさつする	442	24	(5	19)
礼する	216	20	(3	17)
喜ぶ	59	4	(3	1)

具体的な例をあげれば以下のようである。

① 直接表現が先行した例

「(氏名) 先生、このたびの〇〇受章まことにおめでとうございま
す。(中略) お祝いのことばといたします。」

(140『藍綬褒章受章祝賀会祝辞』)

「県民の皆さん、明けましておめでとうございます。(中略) 新年
のごあいさつといたします。」 (811『年頭あいさつ』)

「……こころよくお引き受け賜りまして、まことにありがとうございました。心から厚く御礼申し上げます。」

(731『学校教育審議会あいさつ』)

「……本当におめでとうございます。心からお喜び申し上げます。」

(269『納税功労者表彰式祝辞』)

② メタ言語表現が先行した例

「……祝辞といたします。皆さんおめでとうございました。」

(770『高等学校卒業式祝辞』)

「一言お礼のごあいさつを申し上げます。(中略) まことにありが
とうございました。」 (106『副議長辞任あいさつ』)

「……お礼のことばといたします。まことにありがとうございました。」

(137『議員当選祝賀会謝辞』)

「……心からお喜び申し上げます。(中略) 〇〇線開通、おめでと
うございました。」 (721『鉄道開通を祝うメッセージ』)

さらに、単発的ではあるが「餞のことばとする／壮行の辞とする／

称賛する／健闘を祈る」というメタ言語表現に対応する（やや広義に解釈して）直接表現が、それぞれ一例ずつ観察された。いずれも直接表現が先行している。

「……一步一步誠実に自己の生きる道を開拓してください。（中略）前途のご多幸をお祈りしまして、教育委員会の饞（はなむけ）のことばといたします。」（767『高等学校卒業式饞のことば』）

「がんばって下さい。そして勝ち抜いてください。（中略）正々堂々と活躍されんことをお祈りして、壮行の辞といたします。」

（965『国体参加選手団壮行会壮行のことば』）

「皆さん、ほんとうによくやって下さいました。（中略）衷心から皆さんがたのお手柄を称賛申し上げ、……。」

（968『都市対抗体育大会優勝祝賀会祝辞』）

「……正々堂々と戦って下さい。そしてこの大会をますます有意義なものに築き上げて下さい。（中略）それでは、皆さんのご健闘をお祈りして、私のごあいさつといたします。」

（972『少年野球大会祝辞』）

以上の事例からわかるように、直接表現は聴衆に文字通り直接話しかけるという表現姿勢をもっている。「おめでとうございます」「ありがとうございます」などの定型的な表現形式には、「祝う／礼する」という言語行動を支える話し手の心情が率直に表出されようし、「～ください」などの文末形式には「祈る／願う／望む」などの言語行動の意図が、メタ言語表現のように間接的な説明の形ではなく、直接的に表現されている。

こうした表現性をもつ直接表現は、しかしながら、今回対象とした公的あいさつ資料には表8のようにごくわずかにしか現れず、対比すべきメタ言語表現の頻出する姿からすればきわめて劣勢な位置しか占めていない。このことについては、これまでメタ言語表現の動詞（句）や文末形式についても指摘した、あいさつのあらたまり性との関連がやはり想起されるべきだろう。すなわち、あいさつの場面やあいさつの行動そのものをあらたまったものと

して扱おうとする話し手の意図は、表現の直接性を避けるという表現姿勢に結びつくということとの関連である。これは、3.4.で今回のメタ言語表現の文末には、前稿で専門的文章に目立った表現主体の意志や希望を明示する形式（「～したい／～しようと思う」など）がきわめて少ないという事実に関して指摘したことと重なる。表現や言語行動のあらたまりは、一つには、聞き手に対して一定のへだたりをおいた姿勢を選ぶことによって実現される。上に検討したような意味での表現の直接性をもつ直接表現は、まさにその直接性ゆえに、話し手と聞き手のへだたりをあらたまった公的あいさつにふさわしく保つには不適な表現として、積極的な選択の対象とならないと考えるのである。

かつて杉戸1983b, 同1985において、官公庁を中心とする公用文という書きことば資料について、ここでいうメタ言語表現と直接表現をとくにその文末に注目して検討したことがあった。そこでは、公文書の種類によって今回のあいさつ資料よりは多くの割合で直接表現が採用されていたとはいえ、やはり、メタ言語表現の方が優勢な状況であったといえる。そのような状況にも、上に考えたような言語行動としてのあらたまり性ととの関連が指摘できると思われる。

なお、今回別扱いとした「宣言・決議・要望」の類は、この直接表現の観点からも一般の公的あいさつとは異なる。この類には、それぞれの「宣言」などの言語行動の中心的な内容を「われわれは～する。／～は～である。／～するものとする。／～されたい。／～すること。」などの文末表現（敬語要素のないものも多い）でもって表現する、メタ言語表現以外の文が数多く現れる。以下のようなものである。

「……吾等は自ら立って、名実ともに、清潔で住みよい郷土の建設を推進する。右、宣言する。」（214『環境衛生都市宣言』）

「……市民の奉仕者である公務員として、常にその責任と義務を果し、もって〇万市民の付託にこたえるべきである。以上、決議する。」

（150『綱紀肅正に関する決議』）

「……下記項目について格段の配慮をされるよう強く要望する。

1. ……をはかること。/2. ……をはかること。……」

(154『交通事故の徹底防止に関する決議』)

当該の言語行動（宣言など）の背景となる状況説明や言語行動に至った経過説明などを除くと、そうした文末をもつ文はそれぞれの言語行動の直接表現だと言うべきものである。このような直接的な表現が多くの場合箇条書き的に列挙されることによって、「宣言」などの言語行動が成立する。この類におけるメタ言語表現は、集録された「宣言」などの例数59に対して81例だけであった。これら以外の一般あいさつが平均して3個から4個のメタ言語表現を含んでいたのに比べれば少ないというべきである。この類においては、メタ言語表現を選ぶことによって聞き手とのへだたりを保ちあらたまりを表現しようとする姿勢よりも、直接表現によって訴えかけの態度をよりはっきりと率直に表現する姿勢が選ばれやすいと解釈されるのである。

4. まとめ

以上、公的あいさつにおける、言語行動を説明する言語表現類型としてメタ言語表現の現れを検討し、つぎのような諸点を指摘した。

- ① 公的あいさつには、一つのあいさつ例に平均して3～4回と、かなり頻繁にメタ言語表現が現れる。
- ② 言及される言語行動の種類にも、言及するメタ言語表現の中心的な動詞（句）の種類にもある程度のバラエティが見られる。
- ③ 中心的な動詞（句）には、表現のあらたまりを目指したと解釈されるレトリカルな言い回しのものが目立つ。
- ④ 動詞（句）を連用的に修飾する要素は、あいさつの中での当該の言語行動の位置、言語行動を行っているその時機、言語行動の様態、言語行動にまつわる謙遜などの前置き、行動主体の姿勢や態度など、その内容にバラエティがある。
- ⑤ 動詞（句）の表す動作の目的や動作内容には、それぞれの言語行動

の種類ごとに傾向的な特徴が認められ、そこに公的なあいさつの文言の定型性が観察される。

- ⑥ メタ言語表現が出現する頻度については、同一の種類 of 言語行動についてのメタ言語表現が一つのあいさつ例に2回以上繰り返すものと1回だけのものとは、その言語行動の種類によって片寄りを示す場合がある。
- ⑦ メタ言語表現の文末形式も、いくつかの特徴的なバラエティへの集中という片寄りが見られる。あいさつのあらたまりや表現の格調を目指したと解釈されるレトリカルな形式も一群のグループとして現れる。
- ⑧ 専門的文章という書きことば資料で優勢であった意志や希望を明示する文末形式は公的なあいさつにおいてはごく少数しか現れない。相手とのへだたりを保つことによってあらたまりを表現するため、直接的な表現を避けたものと解釈される。
- ⑨ 文末をはじめとする敬語要素は、それが少ない「宣言・決議・要望」の類を別にすれば、あいさつのメタ言語表現には相当豊富である。
- ⑩ メタ言語表現は、あいさつの冒頭と末尾という2か所、とくに末尾に多出する。定型的な位置と言える。同じ種類の言語行動に言及するメタ言語表現が繰り返してこの位置に出現することもまれではない。これらに比べて中間位置にはそれほど多く現れない。
- ⑪ 一つの文中に、二つ以上のメタ言語表現（動詞）が並立・複合的に現れることも多い。「～とする」という文末はこの場合の後位置に現れて表現を締めくくる定型である。また「～と～を言う」式の並列も見られ、その内容の類型化も可能性がある。
- ⑫ 当該の言語行動を直接的に表現する直接表現は、メタ言語表現に比べて少ない。これは、あいさつのあらたまり性を目指して表現の直接性を避けた結果と解釈される。

ここで扱った言語表現類型を検討することが、より広くは言語行動とかコ

コミュニケーションについて考えようとするときの具体的な有力な手がかりになるであろうこと、また、より確実な手がかりとするためには、さまざまなジャンルの言語資料・言語作品にわたって当該の表現の検討を蓄積することが不可欠であること、の2点は前稿で触れた通りである。今回の検討もそうした作業の一環である。

筆者らはこの問題を、言語行動という研究領域でメタ言語表現という言語表現類型に着目するという枠組みで検討している。いうまでもなく、ここでの問題はいわゆる語用論 (pragmatics) や発話行為論 (speech act theory) での論点と重なるところが多い。

たとえば、今回あいさつについての検討の一つの焦点に据えた「あらたまり」という基準は、前稿の専門的文章で焦点とした「内容のわかりやすさ」という基準と並んで、語用論において言語運用に関する基本的原則とされる2本柱 (内容・伝達における明快さの原則と対人的な丁寧さの原則) とに対応したことがらである。

また、メタ言語表現が明示的に意味するのは、発話行為論におけるいわゆる発語内行為 (illocutionary act) の内容と関係がきわめて深いことがらだろう。その枠組みで言えば、本稿の行った検討は、公的あいさつにおいてはどのような発語内行為が行われるのか、その発語内行為を言語的に表現するのは、具体的には直接表現かメタ言語表現かのいずれであるのか、また、表現するのがメタ言語表現である場合、その形態的・文型的・文章論的な特徴はどのようなものであるのか、などという内容に該当するだろう。ここでメタ言語表現という用語でひとくくりにした動詞 (句) も、発話行為論のこれまでの蓄積からすればいくつかの種類に分類される可能性がある。

今後、対象を拡大し作業を蓄積していく過程では、そうした枠組みや視点を総合的に考慮に入れていく必要があることは言うまでもない。

参考文献

- Austin, J. L. 1962 *How to Do Things with Words* (Oxford, London) 邦訳『言語と行為』(坂本訳, 大修館書店, 1978)
- Brown, P. and Levinson, S. C. 1987 *Politeness: Some universals in language usage* (Cambridge Univ. Press, Cambridge)
- Levinson, S. C. 1983 *Pragmatics* (Cambridge Univ. Press, Cambridge)
- 西山祐司 1983 「発話行為」(安井稔他編『英語学体系 5 意味論』, 大修館書店)
- Searle, J. R. 1969 *Speech Act: An essay in the philosophy of language* (Cambridge Univ. Press, Cambridge) 邦訳『言語行為』(坂本・土屋訳, 勁草書房, 1986)
- Searle, J. R., Kiefer, F. and Bierwisch, M. (eds.) 1980 *Speech Act Theory and Pragmatics* (D. Reidel Publishing Co., Dordrecht, Holland)
- 杉戸清樹 1983a 「待遇表現としての言語行動 —〈注釈〉という視点」(『日本語学』2-7, 明治書院)
- 1983b 「言語行動の規範とその運用の実態」(文部省科学研究費・特定研究〈言語の標準化〉総括班成果報告書)
- 1985 「文書の定型表現」(『言語生活』408号, 筑摩書房)
- 1989 「言語行動についてのきまりことば」(『日本語学』8-2, 明治書院)
- 杉戸清樹・塚田実知代 1991 「言語行動を説明する言語表現 — 専門的文章の場合」(国立国語研究所報告 103 『研究報告集 12』, 秀英出版)
- Wierzbicka, A. 1987 *English Speech Act Verbs: A semantic dictionary* (Academic Press, Sydney)
- 山梨正明 1986 『発話行為』(太田朗他編, 新英文法選書 12, 大修館書店)